

【論文】

担当制をしく児童養護施設のくらしに対する 職員のかかわり

—施設経験者が語るライフラインを手がかりにして—

田谷 幸子*

要旨: 本研究は、児童養護施設（以下、施設）経験者の施設のくらしをどのように考え、自分の人生の一部として意味を見出していくのかについて、ライフライン・インタビューを用いたヒアリングから職員のかかわりを明らかにすることが目的である。分析の結果、施設経験者のくらしに対して担当制による支援、施設入所理由の理解の支援、担当職員の変更の支援、退所時の支援の4つの支援すべてがなされていることに意味があった。また、彼らの人生を支えるものとして、職員との愛着形成が挙げられるが、施設長との関係形成も重要であることがわかった。また、非常に見えにくく、捉えにくい施設経験を理解するにあたり、調査者との相互認識による関係形成の上でのライフライン・インタビューは有効であり、ライフラインを通して施設経験を自らの人生の一部として捉え直す振り返りが示唆された。

Key Words: 児童養護施設のくらし、ライフライン・インタビュー、施設経験の肯定化

1. 研究の動機と研究目的

本研究は、児童養護施設（以下、施設）経験者が施設でのくらしをどのように考え、自分の人生の一部として意味を見出していくのか、施設経験者の語りを引き出す中で、彼らの思いを言語化し、職員のかかわりに焦点を当てて分析を行い、職員のかかわりの意味を検討することが目的である。

先行研究では、彼らの退所後の生活の実態把握調査がなされ、彼らの家族背景、低学歴による不安定就労、希薄な人間関係などが問題とされた。武藤（2012）は近年行われた調査を概観し、共通の課題として、「孤立感」「人間関係を築く難しさ」「公的な手続きの知識」「経済的困難性」を挙げ、その中でも、「孤立感」と「人間関係を築く難しさ」については関係性の課題とし制度の充実だけでは解決が難しいとしている。宮田（2015）は、施設経験者の生活困難を克服するカギは経験者自身が持つ「力」としその「力」を高める環境整備（子どもの持っている力を高める環境、子どもが安心して過ごせる環境、それらの環境が長期にわたって準備されていること）を主張している。そのための施設処遇について、

2016年12月31日受付／2018年1月15日受理

* 東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科博士後期課程

小田川（2015）は、入所理由の理解支援、施設における生活と職員の関わり、退所準備及び退所直後の生活の支えが必要と主張している。また、谷口（2011）は、入所前の発達課題から脱出、施設生活での居場所の確保と脱出、援助者及び援助組織との合意形成が必要としている。これらは施設の処遇の問題である。しかし、同じ施設経験者でも退所後の生活は同じではなく、施設経験者間で差が生じている。その理由として施設経験者自身のとらえ方が問われてくると考える。先行研究では、施設経験者自身にそのことを問うことはなされておらず、施設経験者のアイデンティティとして内田（2011）が自己了解の形成プロセスの課題を提示している。施設経験者の思いや考えは非常に見えにくく、捉えにくい。本研究は、施設経験者の思いの言語化を促し、彼らの語りを適切に聞き取るための手法を検討している。また、彼らが施設での衣食住や学習、生活習慣の獲得といった生活にとどまらず、施設経験をどのように捉え、自分の人生の一部としての位置づけているのかに主眼を置き、彼らの思いや価値の形成過程に着目しながら、施設の暮らしにおける職員のかかわりの意味を検討する。

II. 研究の視点および方法

首都圏の施設（以下、A施設）経験者を対象に半構造化インタビューを実施した。調査協力を得た12名のインタビューデータを、ライフラインを手掛かりとして分析を行った。

1. 対象者

本研究では、A施設経験者に施設生活および退所後の生活についての質問紙調査を実施した。ヒアリング調査は質問紙調査の項目で「自立している」、「充実した生活を送っている」に「とても思う」、「思う」にチェックをしたA施設経験者のうち、ヒアリング調査への協力を受諾したA施設経験者12名（以下、この12名をA施設経験者とする）に2014年8月～2015年3月までの間に実施した。理由として、退所後の生活の安定に施設でのくらしが与えた影響を調査することで、施設での支援として重点化すべき支援を明らかにするためである。ヒアリング調査は質問紙調査を元に質問を行う形式をとった。ヒアリング時間は平均2時間であった。ヒアリング調査協力者は、男性5名、女性7名、インタビュー当時の年齢は30代後半4名、30代前半5名、20代後半1名、20代前半2名である。入所時の年齢は平均4.5歳（2歳～11歳）、退所時の年齢は平均17.4歳（10歳～20歳）である。

本調査は施設の生活の偏差をできる限りなくすために、A施設に限定して行っている。調査協力を得るに当たり、本研究の趣旨を説明し調査依頼を複数の施設に行ったが、本調査は施設の評価に直結することから協力を得ることが困難であった。本調査の趣旨を理解し、当事者主体のくらしを検討することに一致点を見出してくれたのはA施設のみである。質問紙調査の結果が先行の社会的養護経験者調査の結果と大きな違いはなく、A施設での調査は一般化可能と判断した。A施設は、生活する場を「〇〇家」と称し家庭的環境設定に配慮した小規模グループケアを展開し、入所から退所まで子どものケアを中心に行う特定の職員や子ども集団を可能な限り変えずに担当する担当制をとっている。また、退所後、退所者は担当職員や施設との継続した交流を持ち、連絡の頻度や訪問の回数はA施設のある自治体の社会的養護出身者調査でも極めて高い。また、施設行事には多くの退所者が参

加をしている。

2. 倫理配慮

調査実施にあたり、調査対象者には質問紙調査実施時及びヒアリング調査実施時に口頭・文書にて十分に説明を行い、調査協力への同意を得た。調査対象者の了解を得たうえですべてのインタビューデータは録音し文字データ化した。ライフラインは個人情報の取り扱いについて十分配慮し個人が特定されないように最大限の注意を行っている。なお、本研究は帝京平成大学倫理審査委員会の審査を受け承認を得て実施している。

3. 分析方法

本研究ではライフライン・インタビューを手掛かりとしてA施設経験者の施設でのくらしを分析した。施設経験者が思いを語ることは痛みを伴うこともあり、語れない、語る言葉が見つからないということもある。また、施設経験を振り返ることが難しい場合もあり、彼らの思いや価値観は自分自身においても他者からも見えにくく、捉えにくい傾向がある。彼らの思いを適切に聞き取るためにヒアリングに様々な手法を用いた。その一つがライフライン・インタビューである。Brammer (=1994) はライフコースを分析するためには調査対象者が転機について自覚をすることで、自分の成長を視覚的にわかる必要性を主張しており、自尊感情や人生の浮き沈みを線で表した図を用いたインタビュー方法を「ライフライン・インタビューメソッド」と呼んでいる。河村(2000)は、ライフラインを書くことの意味として、過去から現在まで自分の歴史に一貫性を持つこと、社会関係の中で自分の位置がある程度客観的に理解できることを挙げている。ライフラインを施設経験者自身が記入し、ヒアリングを受けることでA施設経験者が自分の人生を俯瞰し施設経験を人生の一部として見出していくになり、生涯発達の視点から自分自身を捉えなおし、施設経験者自身への気づきを与えることができると考える。言語化だけでは分析時に施設経験者の思いの解釈をゆがめてしまう危険性があることから、ライフラインを描くことにより、言語化が難しいA施設経験者の経験や思いをより適切に理解することができる考えた。もう一つがトランス・ビュー (Trans-view)¹⁾ を可能とするための複数回のヒアリング実施である。調査協力者と調査者の相互の認識し調査者への信頼を深めていく必要から複数回のヒアリングを実施したことにより、A施設経験者の語りの言語化を促すとともに彼らの価値観に即して理解を深めることができたと考える。桜井(2002)が主張する通り、ヒアリングは調査者と調査対象者の共同作業であるため、調査者の意図を追認する可能性がある。そのため、ライフラインを利用することで調査対象者の主観を重要視し、彼らの語りを彼らの価値観や考えに沿って理解することに主眼を置き、可能な限り調査者のバイアスがかからないように意識した。また、12名のヒアリングを行い、彼らの共通点を見出すことで一般化を図っている。一方で、ライフラインは調査対象者の主観によるものであるため、事実とは異なる場合がある。ヒアリングにおいては調査対象者の語りを否定せずに聞く姿勢をとったため、語りと事実の違いが生じている可能性は否定できない。また、自分の人生を思い返し、そのイベントに関して現時点で評価することになるため、その当時の思いとは異なる可能性があるという限界や現在の生活状況が影響している限界がある。ライフラインは、ヒアリング時点まで記入しているが、今回は施設のくらしにおける職員のかかわりを検討するために、入所から退所までのライフラインを示す。

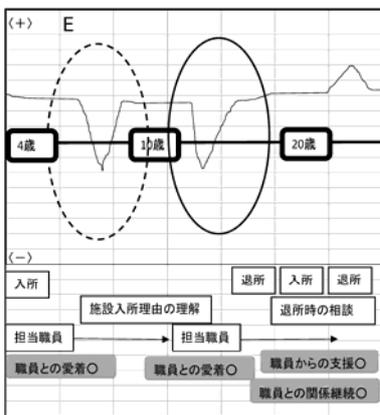
III. 調査結果

1. 退所時のライフラインの位置がプラスだったケース (D・F・G・H・E・J・L)

担当職員が変更した E ケース (①タイプ), 小学期に入所した A・J・L ケース (②タイプ), 幼児期に入所し入所から退所まで担当職員が同じだった D・F・G・H ケース (③タイプ) とする。

ライフライン①タイプ (図 1) の谷は, 施設入所理由の説明²⁾を受けた時と担当職員が変更となった時である。施設入所理由の説明理解は小学 3 年時である。きっかけは, 小学校の友人宅に遊びに行ったときの家の雰囲気の違いから生活している場所が施設であることに気づき, 施設入所への疑問を覚え, 職員に自ら質問をしたことによる。職員から説明を受けることで, 施設入所理由の理解をし, 受け入れたと E は語っている。E はその時の印象を次のように語っている。「ふーんって感じだった。だからってこうしようっていう考えにもならない。その方がまだいいのかなって。」

図 1 ライフライン①タイプ



しかし, E の語りとは異なり, ライフラインでは施設入所理由の説明を受けたことによる谷が生じており, 言葉では表せない思いがあることがうかがえる。ライフラインの谷からの回復の理由を E は「職員との愛着関係」³⁾としている。E は職員を「親」と語るほどの愛着関係を形成しており, その理由を「それ以上の愛情をもらってるから」, 「何をしても受け入れてくれる。全力」と述べている。

E は担当職員の変更を職員に裏切られたと感じている。その時の思いを次のように語っている。

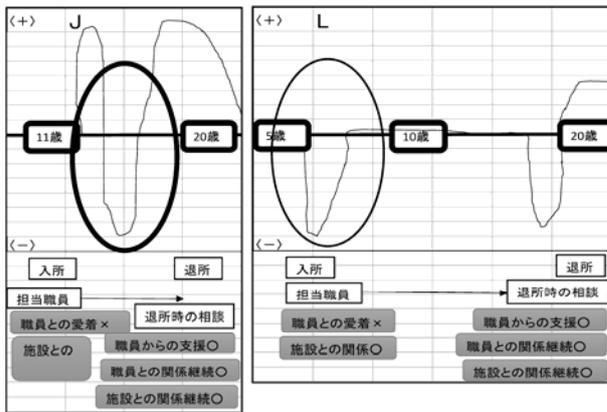
「辞めた職員とかに対しても, なんてとか思った」, 「でもなんで辞めんのみたいな。で, よくずっと一緒に居るからねみたいなの, 言ってくれたりなんかもするんだけど, 別に言ってくれたじゃんみたいなの。」

また, その時の思いを振り返り, 次のようにも語っている。

「職員的にもその時は本気で思ってくれてるから, そう言ってたのに, そこでその言葉を出すのは本当に申し訳ないなみたいな。」

E はライフラインを通したヒアリングの中でその当時の気持ちと向き合い, 職員の行動に理解を示していた。E のライフラインの回復は, 職員変更の理由を何度も説明を受け, 次の職員との愛着関係の形成ができたこととしている。

図2 ライフライン②タイプ



ライフライン②タイプ（図2）は、小学期の入所のため、施設入所の理由を理解したうえで入所をしている。A⁴⁾・Jは、入所前の生活と比較して、A施設での生活は安全で安心できるものであったため、ライフラインは急激な山となっている。A・Jはその時の思いを次のように語っている。A「まあ、良かった。もし普通の家

だったんで、まあ、こっちの方が良かったですよね。」

J「ここに来て、あの、多分、ほっとしたって意味が生きている喜びになるんですかね。ま、ほっとしているっていうのもありますし、まあ、まあ、血は繋がってない…血縁はないですけど、でもこうして、ま、自分以外にも。（略）（親のさまざまな問題を抱えているのは）自分だけじゃないんだなって。」

A・J・Lは幼児期に入所したA施設経験者と異なり、職員に対して「親」という意識はなく、生活を助けてくれる人という認識である。施設入所理由の理解をした上で入所しているため、親の存在をはっきりと認識しており、職員と親を混同して考えることはない。また、職員との関係は良好であったが愛着関係とまではいえないと語っている。職員に甘えたい気持ちはあるが、自分よりも小さい子がいることにより甘えを我慢したり、自分の気持ちを抑えていたりするなど、幼児期に入所したケースとは異なり、子どもの集団での生活による職員との愛着関係の形成に違いが生じている。Aは次のように語っている。

A「ここ（同じ担当職員の子）と自分は同じ担当者だったんで、後から来た俺ともう一人の〇〇はそれほどでもなく、お出かけとか連れてってもらっても、ずるいずるいって言っても、お母さんが来ないって、俺も来ないんだけどって心の中で思ってるんだけど、言ってもしょうがないやって。でも、こっちの方が小さいからしょうがないやって。」

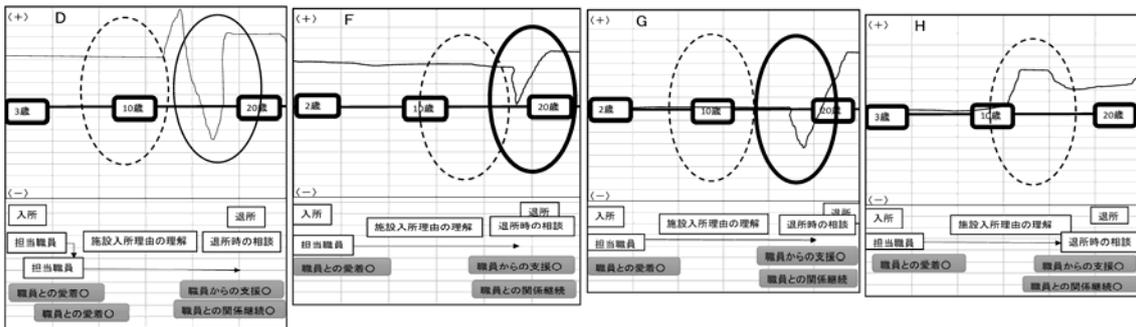
「たぶんこっち（同じ担当職員の子）は小さいから、私だけを見て見て見てって感じだと思うんですけど。」

Lは、入所直後にライフラインの谷がある。施設入所理由は理解していたが受け入れが難しく、施設入所時のライフラインは急激に低下している。しかし、LはA施設の安定した生活や職員や他の職員（施設長）と生活する中で、「ここでがんばるしかない」と気持ちを切り替え、回復している。

ライフライン③タイプ（図3）は幼児期に入所し、自分が施設で生活していることを意識したことはなく、ライフライン①タイプのE同様に、小学期に友人との交流の中で施設の生活を初めて意識し、職員に自ら質問をしている。時期は小学4～6年である。職員より施設入所理由の説明を受け、理解し施設生活を受け入れている。Eと異なり、施設入所理由の理解で、ライフラインに谷は生まれていない。Hは施設入所理由の理解をし、施設での生活を受け入れ、ライフラインが山となっている。彼らは次のように語っている。

G「なんか自分では覚えていないんですけど、なんかすごい聞いていたらしくて、その職員になんでここにいるのかみたいな。それであるタイミングで説明の機会を設けて話して

図3 ライフライン③タイプ



くれました。」

H「ああそういうことなんだなって自然に思いました。」

彼らは施設入所理由の理解が円滑になされている。その理由として E 同様に、職員との愛着関係を挙げている。担当制により同じ職員がケアに当たる効果として子どもの受け入れられている感覚がとても強い。

F「何をしても受け入れてくれる。何をやらかしても。」

「裏切らないっていうのはあると思う。ここは、何があっても絶対やってくれるし、絶対話聞いてくれるし、なんか自分でやんなって感じじゃない。」

G・H「ずっと同じ職員で辞めずにいるのでそれは良かった。」

F は進学から就職に進路変更をした時期に谷となっている。谷がマイナスになっていないことについては以下のように語っている。

F「でも実際このくらい。でも、ここまで落ちて、普通さちょっと病んでからさあ、就職とかするじゃん、もう開き直ってこんなになったもん。でも今の仕事続けていこうと思う。うーん、良い人もいるから。」

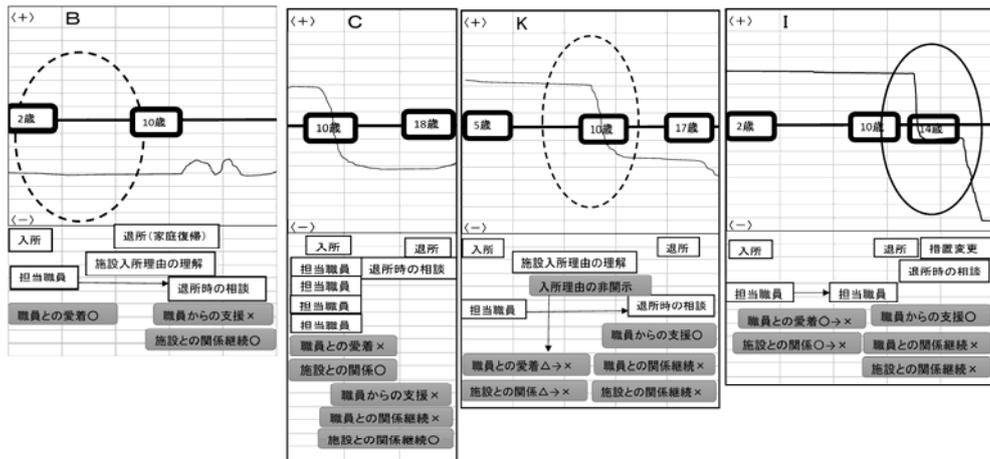
F は進路変更を「開き直って」できた理由を職員がサポートしてくれたことにあると語っている。G は、退所時にライフラインの谷が生じている。進路をめぐる親と対立したことにある。G は、退所時の親との対立から親との関係にある程度の線をつけたと語っており、それができた理由を職員や施設の支えと語っている。

G「今こうやって施設を出た後でも帰ってこれる場所があるっていうのは大きいんじゃないかなって思います。社会人になってからも。こーゆう風に帰れる所もなくって親ともさーゆう関係だったら本当に頼る人がいないじゃないですか。でも定期的にこーゆう風に帰ってきてご飯食べてってさーゆう場所があるのは自分の中で大きいのかなとは思いますが。」

2. 退所時のライフラインの位置がマイナスだったケース (B・C・K・I)

退所時のライフラインの位置がマイナスだったケースは図4である。B・C は入所当初よりライフラインはマイナスである。B は「施設の子」＝「特別な子」という思いが強く、施設入所の理解の受け入れができなかったと語っている。小学校での友人間の会話から施設で生活している子どもは「特別な子」という施設の社会的イメージを強く受け、「親に預けられた」という思いが強くあった。そのため、職員から施設入所理由の説明はたびたび受けており、施設入所理由の理解はしているが、受け入れることができずにいた。職員との愛着関係はあったと語っているが、ライフラインではマイナスの状態が続いている。B

図4 退所時のライフラインの位置がマイナスだったケース



は次のように語っている。

B「施設に入る前は、物心ついたらここにいたんで、なんもわからないです。」

「どちらかというといふ目ですね。子ども同士でもここに居るのは特別な子っていう感じだったんですかね、小学校では。」

「そこも負目だし、預けられたっていう親への思いもありますよね。」

Kは、小学3年時に施設入所理由について職員に自ら質問をしたが、納得のいく説明を受けることができず入所理由が非開示と感じていた。そのため、施設への疑問が強まっていった。施設への疑問の強まりから、職員との愛着関係も良好でなくなり、それに伴い、施設との関係も悪化していった。その時点からライフラインはマイナスの時期となっている。納得のいく説明がなかったことについてKは当時を振り返り、「親は夜の仕事をしています方で、今もそうなんですけど、夜の仕事をしているから会わせてもらえなかった感じ」と説明があいまいであった理由に一定の理解を示していた。

Iのライフラインは、職員の変更が谷となっている。Iは職員との愛着関係は良好で非常に密接な関係であったため、次の職員との関係が良好に推移しなかったと語っている。Iは職員との愛着関係が断ち切れ、次の「職員との愛着関係」の形成ができなかったためにライフラインがマイナスになり、そのまま退所となっている。Iは当時を振り返り、次のように語り、ライフラインがマイナスになった理由を考えている。

I「でも、その時はそう思うけど、大人になってからだとあそこまで格差があっちゃうと、他の子と。自分に対して格差があっちゃうと、私も他の職員の人とやりにくかったり。じゃあ、辞めますってなった時に、どこにも行けなくなっちゃうもう。こうね、愛されてた側だからあんまり言いたくはないけど、その後のことを考えると。」

「自分はたくさん愛情をもらっている。でも、辞めた後のしんどさは、たぶんそこからきたんだろうなあって。」

Cは、施設入所により生活が一変したことで、施設生活に不平不満がいっぱいあったと語っている。A施設入所から退所までライフラインはマイナスである。担当職員は4人変わっており、職員の印象を「僕が思ったのは、管理する人」と語っている。しかし、他の職員（施設長）については、次のような思いを持っていたと語っている。

C「(施設長の影響は) でかいですよ本当に。結局あの施設を作ったこと自体が凄いですからね。えっと、今は要するに子ども虐待とか騒がれて、こういう施設が必要とされてる時

代ですけどね。そういうのを騒がれる前からあーいうのを作って、やってるところが凄いですね。今思うと。あとは、施設出た退所者のことも気にしてくれてるところですかね。」

「施設長が子ども全員を自分の家族と思ってくれてるようなところもありますから。」

Cは入所しているときはライフラインがマイナスであったが、振り返って、自分には施設が必要であったこと、施設を作った施設長への思いを語っている。また、Cは退所時の支援でライフラインがマイナスになったと語っている。

C「退所する2,3日前にもう少し居たいってお願いしたんですけど、まあ、それはダメだって。いや、そういう具体的な数字（何か月）も出さないで、ただ居たいって、僕のがまますけどね。多少遠ざけられてるなっていうのはありましたけど。」

Cは求めた退所時の支援が得られなかったことをマイナスととらえている。また、自分の主張がわがままだったと解釈している。

IV. 調査結果からの考察

A施設経験者のライフラインの谷は「施設入所理由の理解」、「担当職員の変更」、「退所時の支援」の場面で生じていた。ライフラインの回復を促したものとして、「職員との愛着形成」、「施設長との関係」、「職員の支援」があった。

1. 担当制の効果

A施設は入所から退所まで可能な限り担当する担当制をしいている。図3で示すライフライン③タイプは、ライフラインがプラスに維持されている期間が長く、安定したくらしが確保されている。担当職員との関係は良好であり、職員からの支えられ感を強く持ち、ライフラインで谷となっても職員の支えによる回復があった。山田(2008)は「施設のインケアの基本となるのは愛着であり、基本的信頼の獲得の重要性である。」とし、基本的信頼は「漠然とした日々への信頼」が創り上げ、「不確実な人生から確実な人生へと変容させる」力があり、「漠然とした『あて』がある」ことの重要性を主張している。また、「あて」の無さの要因として、山田(2008)は①保障されない進路選択、②背負い込まざるをえない親の存在、③職員の絶対数の不足と人的ネットワークの希薄を挙げ、施設が「帰ることのできる場」であるにもかかわらず、『お世話になった場に、生活に困ったからまたお世話になる』のは容易ではなく、子どもにとって『あてのなさ』を抱え込ませることになると指摘している。A施設経験者の語りから、A施設は進路選択の保障、親に代替する職員との愛着関係、子どもの人生にかかわり寄り添い続ける職員存在による人的ネットワークの保障はなされているといえる。特に、担当制による子どもの人生に長きにわたってかかわり続ける効果は子どもの基本的信頼の確保の保障となる。また、退所後においても、Gの語りのように「帰ってきてご飯食べる」ことのできる場所の保障につながり、「漠然とした『あて』」としてA施設経験者に位置付けられている効果が大きい。

2. 施設入所理由の理解への支援

施設入所理由の理解への支援について、「入所したことへの疑問、不満を施設職員に受け止めてもらえなかったことで、職員に対する不信感を持つことにつながっていた」と小田川(2015)は指摘している。A施設経験者の施設入所理由の説明は子どもが施設入所への

疑問を覚え自ら質問をした時期、小学校中・高学年で行われている。子どもの疑問に一つひとつ応え説明していくことが、子どもの施設生活の受け入れにつながっていた。施設入所理由の理解の受け入れは施設生活の受け入れとなり、施設でのくらしを主体的に捉える転機となっている。A施設経験者の言語化には見られなかったライフラインの谷が職員との愛着関係により回復していた。施設入所理由の説明の時期としては、子どもが疑問を覚え自ら質問した時期で、かつ職員との関係愛着関係が形成されていると判断できる時期に行う必要があることが明らかとなった。一方、疑問に答えていないと子どもが感じたときには、ライフラインはマイナスとなり、良好であった職員との愛着関係や施設長との関係の悪化をもたらし、施設でのくらしそのものが成り立たなくなっている。施設入所理由については職員に確認し、特段の差異はないとの判断を受けている。

3. 担当職員の変更の支援

担当職員の変更は、子どもにとって職員との愛着関係の断絶を意味し、子どものくらしを一変させ、ライフラインがマイナスになったように子どもの人生の危機を意味していた。複数回にわたり担当職員の変更があると、職員との愛着関係の形成はできない状況にあった。担当職員が入所から退所まで同じであったケースではライフラインがプラスを維持し、比較的安定している。宮田（2015）の指摘の通り、子どもが安心して過ごせる環境が長期にわたって準備されていることが必要であった。

また、施設入所時の年齢が上がっていくにつれ、職員との愛着関係に違いがあることが分かった。A施設経験者の場合、5歳が分かれ目となっており、低年齢では職員を「親」とみる職員との愛着関係が形成されていたが、それ以降は「生活を助けてくれる人」というイメージに変化している。これは親の存在の認識や担当制といえども集団で子どもが生活することによる職員との関係が影響していた。

A施設経験者のライフラインを通したヒアリングの中で、入所していた当時の思いとは異なる発言、施設職員を理解する発言や自分のライフラインのマイナスを分析する発言がなされており、施設でのくらしを肯定的に受け止める様子が見られた。

4. 退所時の支援

退所時の支援については、子どもの希望に沿った支援に意味があった。特に職員や施設から全面的支援が子どもの安定を支えていた。小田川（2015）は退所準備への具体的な支援の必要性を指摘している。しかし、A施設経験者の語りでは、情報提供や学習支援といった具体的な支援だけでなく、漠然とした不安への全面的な支援が求められていた。Cは漠然とした不安への気持ちの吐露を「自分のわがまま」と言っているが、これらを支えることがライフラインをプラスに維持し、子どものくらしを支えることになると考えられる。特に、退所時前後は、進路の変更、親との関係の見直しなど、急激かつ緊急の外的変化が生じやすい状況にあり、そのような変化に子どもが揺さぶられることへの支援が必要である。

V. まとめ

先行研究において様々な支援の必要性が主張されているが、本研究では、A施設経験者の語りから、A施設経験者の施設入所理由の理解への支援、担当職員の変更、退所時の支

援、担当制による支援の4つの支援すべてがなされていることに意味があることがわかった。特に、担当制の効果として、長期にわたり子どものケアを担当することで、子ども自身が職員を担当と認識するだけでなく自らの人生を支える存在として認識し、施設退所後のその認識を持ち続けることが明らかとなった。同様に施設長の存在が子どもに影響を及ぼし、施設退所後の関係に影響を与えていることがわかった。

今回の調査においては、自己表現が難しい子ども期の語りや、語ることが難しい施設経験への思いを真実に近い形で聞き取り、適切に理解し、受け止めるための方法を検討し、ライフライン・インタビューと複数回ヒアリングに彼らの思いを表現する方法を見出した。これらの手法により、A施設経験者の感情を伴う思いが表現され、言語化をさらに促すことができた。また、A施設経験者の言語化していくことに寄り添うことを重視したことにより、彼らが思いを吐き出すだけでなく、思いを自らに問いかけ、受け止め、語りを変容させていく状況があった。さらに、ライフラインを描くことにより、自分の人生の一部として施設での暮らしを捉え、施設入所当時に抱いていた思いや考え、職員や施設のケアへの思いや考えを自ら見つめ直しことで、施設の暮らしを受け止め直し肯定化する変化がみられた。施設経験者が施設での暮らしを振り返り、それらへの解釈を変えていくことについてはこれまで明らかとされておらず、施設での暮らしを振り返る意味があることが明らかとなった。これについてはライフライン・インタビューが本来意図するところである。

本調査は施設の生活の偏差をできる限りなくすために、A施設に限定して行っており、A施設経験者からの視点という限界がある。さらに、質問紙調査の項目で「自立している」、「充実した生活を送っている」に「とても思う」、「思う」にチェックをしたA施設経験者への調査であり、施設経験者であることを受け止められている理由が現在の生活の安定度と関係している可能性は否定できない。しかし、現在の生活が安定することに施設での支援がどのように有効だったのかを検討するために、安定しているからこそその彼らの意見は重要な意味があると考えられる。今後の課題として、2点挙げる。第一に、退所時のライフラインがマイナスであった子どもたちの退所後における変容過程の分析、第二に「施設の子」である自分を内在化し、「施設」の社会評価を自己評価として刷り込まれているが、退所後に施設を捉え直し、「施設の子」であった自分を肯定的に捉え直ししていく過程の分析が求められる。

注

- 1) 安田・サトウ(2012)は、トランス・ビュー(trans-view)を見方(view)の融合(trans)とし、お互いの異なる見方を融合することになることから結果の真症性(authenticityあるいはtrust-worthiness)に近づくものとしている。
- 2) 施設入所理由は、児童相談所からの措置理由ではなく、施設が子どもに施設に入ったいきさつを説明したものを指している。
- 3) 愛着関係にあるかどうかについては、愛着機能尺度(Attachment-Function Scale)における①近接性の維持に関する期待、②安全避難所に関する期待、③安全基地に関する期待の3項目を参考にした。
- 4) Aはライフラインの承諾が得られていないため記載しない。

引用文献

- Brammer, M. L. (1990) *How to Cope with Life Transitions: The Challenge of Personal Change*, Hemisphere Publishing. (=1994, 楡木満生・森田明子訳『人生のターニングポイント——転機をいかに乗り越えるか』プレーン出版.)
- 河村茂雄 (2000) 『心のライフライン——気づかなかった自分を発見する』誠信書房.
- 宮田暢子 (2015) 「児童養護施設退所者の不利, 困難, 貧困を克服する手立て」埋橋孝文・大塩まゆみ・居神 浩・ほか編 (2015) 『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅡ——社会的支援をめぐる政策的アプローチ』ミネルヴァ書房, 27-40.
- 武藤素明 (2012) 『施設・里親から巣立った子どもたちの自立——社会的養護の今』福村出版.
- 小川田華子 (2015) 「児童養護施設退所者の自己肯定感の向上の契機」埋橋孝文・大塩まゆみ・居神 浩・ほか編『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅡ——社会的支援をめぐる政策的アプローチ』ミネルヴァ書房, 41-63.
- 桜井 厚 (2002) 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 谷口由希子 (2011) 『児童養護施設の子どもの生活過程——子どもたちはなぜ排除状態から抜け出せないのか』明石書店.
- 内田龍史 (2011) 「児童養護施設生活者／経験者のアイデンティティ問題」西田芳正・妻木信吾・長瀬正子・ほか『児童養護施設と社会的排除——家族依存社会の臨界』解放出版社, 158-77.
- 山田勝美 「児童養護施設における子どもの育ちと貧困——社会的不利に置かれた子どもの『あてのなさ』」浅井春夫・松本伊知郎・湯澤直美編 (2008) 『子どもの貧困——子ども時代の幸せな平等のために』明石書店, 136-53.
- 安田裕子・サトウタツヤ (2012) 『TEM でわかる人生の経路——質的研究の新展開』誠信書房.

Relationship of Staff for Children's Life in Child Care Center

Adapted a Charge System: As a Clue by Using the Life Line

Talked about Experience of Child Care Center

Sachiko TAYA

The purpose of this research is to clarify the relation of the staff and to confirm the support of facility from the talks with the child care center (hereinafter referred to as "facility") experienced person using a lifeline-interview about the life of the facility and a meaning as a part of their life. As a result of analysis, it was found that the relation of the staff was important in support of the understanding of the facility entrance reason and the support of the change of the staff in charge, the support at the time of the exit for facility. Also, as a way to support their lives, it was found that there were the attachment formation with the staff, the relations formation with the Mayor of facility. In addition, the lifeline interview was effective on one of the relations formation by the mutual recognition with researcher, and suggesting a transformation that recreated facility experience as a part of their life through the lifeline.

Key Words: Life of the child care center, Lifeline-interview, Affirmation of facility experience